
勇者様の憂鬱

氷川類

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者様の憂鬱

【Nコード】

N5703S

【作者名】

氷川類

【あらすじ】

なりたて新米勇者「カイン」は、旅の途中でモンスターと遭遇した。

新米ではあるが優秀なカインは、華麗にモンスターを退治した……と言いたい所だったが……。

雑魚だとばかり思っていたモンスターは、色々な意味で厄介なタイプで……。

変態モンスターに懷かれた勇者様の受難。

BLです。

「おいっ、近寄るなー！」

いきなりだが俺は今とても困った状況にある。

俺の名はカイン、年は十六才、職業は『勇者』だ。

勇者になり早四年。

巷で今流行りの魔王討伐に繰り出した俺はとある山の中で非常に困難な事態に遭遇してしまった。

こてんぱにやられたのかつて？冗談じゃないっ！！

自慢じゃないがアカデミーを首席で卒業した俺は今まで戦闘で負けた事は一度もない。

俺にとっちゃ魔王討伐などは余りにも容易過ぎてつまんねー余興み
たいなもんなんだから！

でもある意味やられた方がましだったかも……と俺は今猛烈に後悔している。

何故かって？

だって知らなかったんだ。倒したモンスターがまさか……

「ええい気色悪いっ、触るんじゃないー！」

「そんな事言って勇者様ったらいいけず」

「離れろっこの変態モンスターがああああ！」

「いやんっ、もっと打って〜」

ド変態だったなんて……

「お前一体何者だっ？」

纏わりつくモンスターをゲシゲシと足で蹴りつけながら引き剥がそうともがくが、如何せんカインは非力だった。

おまけにこいつ、スラリと華奢に見える癖に意外と筋肉質で逞しく、カインの手に負えるレベルではなかった。

「俺はルルザ、年はんーと確か……二百とちよいだった筈。てか勇者様もしかして弱い？」

「う、五月蠅いっ！」

非力な癖に何で勇者になれるのかって？それは……ってか今それどころじゃねーんだよっ！

「うわっ、クッ……お前、何し……た」

「いやね、勇者様が余りにも聞き分けがないからちよつとばかり痺れ針をね……」

「馬鹿なっ……いつの間に？」

いつ仕掛けられたのかすら俺には分からなかった。

何だこいつ……

ザコだとばかり思ってたのにこいつはもしかしてとんでもない能力を持ったモンスターなのか？

何か心なしかさっきより強そうに見える……

「痺れてる顔もセクシィ！その毒よく効くでしょ？思い出しただけで痺れちゃう」

「は？」

「それは本来俺が自分の為に使う毒なの！痺れたまま鞭で打たれたら最高ののよ！」

……前言撤回、こいつはやっぱただの変態野郎だ！

「たっぷり可愛がってあげる」

青々とした葉が茂る大木の幹にカインの体を縛り付けたルルザはその長い舌で可愛らしいカインの顔を舐め上げた。
ザラッとした感触に震えるカイン。

「離せ馬鹿っ！ひっあうッ、どこ触って……」

「どっつてそりゃ勇者様のちんち……」

「うわあああ言つな!」

「シャイなのねえ……苛めなくなっちゃう……」

「お前つ、毒が切れたらぜってー殺してやるからなっ!」

「ふふっ、お好きな様に……」

ニヤリと笑いルルザはカインのズボンに手をかけた。
他の勇者に比べカインは軽装備だった為あつという間に霞もない姿にされてしまう。

「み……見るな」

美しいアメジストの瞳がカインを舐めるように見つめる。
羞恥に顔を染め下肢を隠そうと必死で身をよじるが、俯き恥じらう
その姿はルルザを更に刺激するものでしかない。
つまりは逆効果な訳で……

「勇者様はこついつのは初めてかしら？」

ルルザの手の平がゆつくりと形を変えていく。

「な……に？ひあぁっ、ん」

小さな球状の突起がルルザの手の平に無数に浮き上がり、その手の平でルルザはカインの昂りを扱き始めた。頭を垂れていた雄がルルザの手の中で徐々に雄々しい猛獣へと変化していく。

「ねぇ勇者様、聞こえてる？あなたの蜜の音……」

「ひあっ、知、らなっんああ」

太陽に照らされた褐色の肌にじんわりと汗が滲む。
流れ落ちる汗と昂りから溢れ出した愛液が混ざり合い、ルルザが手の平を動かす度にチュクチュクと卑猥な音を立てる。

「気持ちいいんでしょう？」

「違っっん、んあぁ……気持ち、わりーんだよっ!」

「嘘付きにはお仕置きしちゃう!さあ、ここに取り出したるは神秘のリング。これ、どうやって使うか分かる?」

「知るかつ……うあ、やつ、あああ——」

意地悪な笑みを浮かべながらルルザは銀色に輝くリングをいきり立つカインの昂りの根元にはめた。

「お楽しみはこれからよ」

ルルザが指を鳴らすと同時にリングが収縮を始める。

「クツ……痛い、あああっ」

「いい声で鳴いてね……」

「な、何?……やめろっ、やつ、うあああっ」

刹那、カインの体が大きく震えた。
跪き、隆起した昂りを長い舌で包み込みながら口に含むルルザの姿に軽い目眩を覚える。

じゅぷじゅぷと卑猥な音が耳朶を揺らし、昂りを包むザラザラとした生温かさにカインの顔が歪んでいく。
それは屈辱によるものか、快楽によるものか、カインはそれすらも分からなくなっていた。

「は……ずせ」

「何を外して欲しいの？」

「リング……クツ、外せよっ！」

「もうパンパンだものねえ……苦しいでしょ？」

次から次へと快楽の波は押し寄せるのに、一番欲しい快楽は憎たらしいリングに阻まれ一向に訪れない。
カインの昂りはヒクヒクと脈打ちだらしく雫を垂らし続けた

「あつっ、い、いから……外せっ！」

「どうしようかしら？そうね……可愛くおねだり出来たら外してあげてもいいわよ。イかせてルルザ様って言ってごらん」

ゆるゆると昂りを撫で上げながらルルザは囁く。

羞恥に染まる顔を隠そうともせず、カインはルルザを睨み付けた。

「貴様っ……あっふぁ……殺してや、る」

軽く扱いただけでビクビクと体を震わせる程苦しい癖に、何をされてもカインはその言葉を口にしなかった。

太陽は沈み森に夜が訪れる。小さな声がルルザの耳を揺らした。

「——せろ」

「……？」

「早く……イカせるルルザ！」

「……強情な勇者様なこと」

快楽の波に溺れだらしく涎を垂らしながらも己を曲げない美しく気高い勇者にルルザは白旗を上げた。

「……どうやら俺はあなたに惚れたらしい」

「俺はお前なんか嫌いだっ！」

「それでも構いませんよ」

リングを外し再びカインの昂りを口に含む。

先端の窪みを舌でつつきながら這わせた手の平で猛る雄を扱き上げると、言葉とは裏腹に驚くほど従順にカインは口の中で益々太く固く変化を遂げた。

「ひあっ、クソッお前なん、か……に……ああっ、あんう、やつ、ああッイクッ」

歡喜の聲が森の静寂を破り、カインは激しく震えながらルルザの喉奥に白濁を撒き散らし果てた。

「寝顔はまだまだ幼いのねえ……」

意識を手放し眠りについたカインの髪を指に絡め取りながらルルザはふわりと笑んだ。

「……ルシファー居る？」

満天の夜空を優雅に羽ばたいていた一羽の鴉がルルザの問いに応えるように大きく旋回しながら降りてきた。

「お呼びでしょうかルルザ様……その者は？」

「勇者様だよ。さくつと殺しちゃおうと思ったんだけど、可愛かったからつい……」

「どうするおつもりで？」

「俺は暫くカインと旅するわ。魔城はお前に任せるから好きにしろ」

「御意。全てルルザ様の仰せの通りに……」

羽ばたいていくルシファアの後ろ姿にヒラヒラと手を振りながら、ルルザは再びカインの髪をなで上げた。

非力だけど負け知らずな謎多き勇者『カイン』と、これまた謎多きモンスター『ルルザ』

二人の旅が今始まりを告げた。

お終い

（後書き）

気が向いたら続編書きます。

RPG大好きなんですけど、書くとなると難しいのねw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5703s/>

勇者様の憂鬱

2011年5月14日11時09分発行